








『孝経』のモンゴル文語における曲用語尾の特徴

栗林 均*

北京の故宮博物院図書館に世界で唯一本だけ所蔵されている漢蒙対訳の木版本『孝経』は、印刷技術の特徴から元朝時代の刊本と推定されているが¹⁾、そこに記されているモンゴル文語の字体、正書法、文法、語法、語彙のいずれをとっても、16~17世紀以降のいわゆる「古典式」モンゴル文語とは異なった古風な特徴が認められ、典型的な「先古典期」モンゴル文語の資料とみなすことができる。この小論では、『孝経』のモンゴル文語に用いられている名詞の格語尾について、「古典式」モンゴル文語と比較して目立った特徴を取り上げて考察する。

1. 与位格語尾について

古典式モンゴル文語には、与位格の語尾として  および  という 2つの形があり、前者は「 γ (b) γ (s) γ (d) γ (g) γ (r) で終わる語幹」に付き、後者はそれ以外の語幹、すなわち「母音字あるいは γ (n) γ (ng) γ (l) γ (m) で終わる語幹」に付く。²⁾ この場合、 と  は、それが付く語幹の末尾字(=末尾音)の種類によって書き分けられており、この正書法の規範は現代のモンゴル文語にもそのまま継承されている。

さて、『孝経』において、与位格語尾は全部で 72 回現れる。これを語幹末尾の文字の種類によって見ると、「 γ , b, s, d, g, r で終わる語幹」に付いているものが 30 回、「母音字, n, ng, l, m で終わる語幹」に付いているものが 42 回となっている。一方で、その字形に注目すると、72 回ともすべてが  という形であり、 という形は 1 回も現れない。つまり、『孝経』において、与位格の語尾は語幹の末尾字の種類に関係なく、 という形だけが用いられているのである。³⁾

このように、先古典期モンゴル文語においては、古典式モンゴル文語の正書法にあ

* 日本大学

1) W. Fuchs, "Analecta zur mongolischen Uebersetzungsliteratur der Yuan-Zeit", *Monumenta Serica* XI (1946), S. 33-64.

2) 「先古典期」のモンゴル文語の字形は、後の時代の丸みを帯びたモンゴル文字とは異なるが、ここでは印刷の都合上、現代のモンゴル字の字形をもって代用する。

3) 拙論「モンゴル語古訳本『孝経』における正書法上の一特徴」『論文与紀念文集』呼和浩特, 1997年, 264-278頁。

てはまらない事例が少なからず存在するが、それは必ずしも「規範の不在」や「正書法の混乱」を意味するとは限らない。与位格語尾の正書法に関して言えば、『孝経』で語幹末字の種類による書き分けが行われていないことは、古典式モンゴル文語の正書法からすれば確かに「規範からの逸脱」であるが、そこには「混乱」ではなく古典式とは異なる「別の規範」があるとみなすことができる。『孝経』では一貫して ᠰᠢ という形が用いられていることからすれば、むしろ「与位格語尾は(語幹末の字種に関係なく) ᠰᠢ という形を書く」という規範が存在していたと考えるのが妥当であろう。

ところで、「与位格語尾には常に ᠰᠢ という形を用いる」というのは、『孝経』だけに見られる特徴なのであろうか、それとも他の先古典期モンゴル文語文献にも共通に見られる特徴なのであろうか？ 以下は、13~14 世紀に属する主要なモンゴル文語の資料において、語幹から離して書かれた与位格語尾が何回現れるかを調査したものである。⁴⁾

○主要な文献における、与位格語尾の出現回数(語幹から離して書かれたもの)

| 文献・資料 | γ, b, s, d, g, r で終わる語幹に | 母音字, n, ng, l, m で終わる語幹に |
|-----------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 1224~1225年のチンギス汗碑文 | 1回 | 1回 |
| 1246年のグユク汗の書簡中の印璽 | 0回 | 1回 |
| 1253年の少林寺聖旨碑, 第1截 | 0回 | 2回 |
| 1261年の少林寺聖旨碑, 第2截 | 5回 | 1回 |
| 1268年の少林寺聖旨碑, 第3截 | 5回 | 1回 |
| 1267~1279年のイル汗国王アバガ書簡 | 0回 | 1回 |
| 1289年のイル汗国王アルゲン書簡(1) | 0回 | 3回 |
| 1290年のイル汗国王アルゲン書簡(2) | 0回 | 9回 |
| 1302年のイル汗国王ハサン書簡 | 2回 | 1回 |
| 1302年のイル汗国王ウルジェート書簡 | 1回 | 6回 |

4) 資料のうち、「少林寺聖旨碑」(第1截~第3截)については、
中村淳・松川節「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究VIII』中央ユーラシア研究会、1993年、1-92頁による。

その他の資料については、

道布整理、转写、注释『回鹘式蒙古文文献汇编』北京、1983定による。

なお、再帰所属の与位格形のうち、再帰所属の語尾が与位格語尾と連ねて書かれているもの(-duriyan/-duriyen, -turiyan/-türiyen)は別の語尾として上の回数には含めず、再帰所属語尾が与位格語尾から離して書かれている場合(-dur-iyān/-dür-iyen, -tur-iyān/-tür-iyen)は、回数に含めて数えた。

| | | |
|-------------------|-----|-----|
| 1312年の入菩提行経注解 | 18回 | 29回 |
| 1335年の張応瑞碑文 | 19回 | 37回 |
| 1338年の竹温台碑文 | 7回 | 21回 |
| 1340年の雲南王阿魯碑文 | 1回 | 10回 |
| 1346年のハラ・ホリン興元閣碑文 | 2回 | 10回 |
| 1362年の西寧王忻都碑文 | 12回 | 36回 |

上記 16 種類の文献資料において、語幹から離して書かれた与位格語尾は総計 242 回現れるが、それらはすべて \mathfrak{B} という形で書かれており、 \mathfrak{B} という形は 1 回も見られない。これにより、「先古典期」のモンゴル文語においては、「与位格語尾を常に \mathfrak{B} という形で書く」ことが正書法の規範として確立していたことは明らかである。

それでは、モンゴル文語の歴史の中で、与位格語尾としてはたしていつから \mathfrak{B} という形が書かれるようになり、語幹末の子音(字)の種類に応じた書き分けが行われるようになったのかという新たな問題が浮かび上がってくるが、ここでは問題を提起するにとどめておく。

2. 造格語尾について

古典式モンゴル文語では、造格語尾は語幹が母音字で終わる場合には \mathfrak{B} (-bar/-ber) という形が用いられ、語幹が子音字で終わる場合には \mathfrak{B} (-iyar/-iyer) という形が用いられている。

『孝経』では、造格語尾として \mathfrak{B} (-bar/-ber) という形と、 \mathfrak{B} (iyar/-iyer) という形がそれぞれ 17 回現れる。古典式モンゴル文語と同様、前者は母音字に終わる語幹につき、後者は子音字に終わる語幹についている。しかし、『孝経』が古典式モンゴル文語の正書法と異なるのは \mathfrak{B} が常に語幹に連ねて書かれていることである。古典式モンゴル文語では、他の格語尾と同様、 \mathfrak{B} も \mathfrak{B} も語幹から離して書かれる。『孝経』においても \mathfrak{B} の方は語幹から離して書かれているが、 \mathfrak{B} の場合は 17 回ともすべて語幹と連ねて書かれており、語幹から離して書かれたものは 1 回もない。これも、きわめて一貫していることから、「造格語尾の \mathfrak{B} は語幹と連ねて書く」という規範が存在していたことを窺わせる。

これについては、おそらく造格語尾の \mathfrak{B} (-bar/-ber) を語幹から離して書いた場合、強意の小詞 \mathfrak{B} (ber) ——これは『孝経』では 13 回現れる——と同形になることから、これらを区別するために前者を語幹と連ねて書いたのではないかと推定することができる。

なお、『孝経』には、*yosuγar* 「理によって」という形が1回だけ現れる。これは *yosu* 「理」という語幹に *-γar/-ger* という造格語尾のついた形と見なすことができるが、『孝経』において *-γar/-ger* という語尾が用いられている例はこれ以外に見あたらない。したがって、『孝経』のモンゴル語においてこの語尾はすでに生産的な機能を有しておらず、特定の語にのみ「化石化」して残っていたものと考えられる。なお、*yosuγar* という形は古典式モンゴル文語においても、現代のモンゴル文語においてもそのまま用いられている。

3. 奪格語尾について

古典式モンゴル文語では、奪格語尾は ᠠ (*-ača/-eče*) という形 1 種類だけであるが、『孝経』では ᠠ (*-ača/-eče*) および ᠳ (*-dača/-deče*, *-tača/-teče*) という 2 種類の形が用いられている。

N. Poppe は *Grammar of Written Mongolian* (1954) において、*-dača/-deče*, *-tača/-teče* という語尾を “Double Declension” のひとつとして、与位格の *-da/-de*, *-ta/-te* と奪格の *-ča/-če* が結合したものとしている。⁵⁾ ここではその起源的な説明の妥当性については論じないが、「先古典期」のモンゴル文語において *-dača/-deče*, *-tača/-teče* という形と、*-ača/-eče* という形が、同じ「奪格語尾」の異形態の関係にあったという事実が見逃されていることを指摘しておく必要がある。

「先古典期」のモンゴル文語において、奪格の *-dača/-deče*, *-tača/-teče* と *-ača/-eče* は、それぞれ次のような環境で使い分けられている。⁶⁾

-ača/-eče : 「d 以外の子音字」および「ai, ei, ui, üi 等の二重母音字」で終わる語幹に。

-dača/-deče, *-tača/-teče* : 「母音字」および「子音字 d」で終わる語幹に。

『孝経』では、 ᠠ (*-ača/-eče*) が 43 回、 ᠳ (*-dača/-deče*, *-tača/-teče*) が 5 回用いられている。例：

5) N. Poppe, *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden, 1954, p.78.

6) 『元朝秘史』のモンゴル語においても、まったく同様な使い分けが見られる。

ただし、同書では *ger-teče* 「家から」(5 回) と、*qadun-dača* 「妃から」(1 回) という形が例外として現れる。これらの語では語幹が「d 以外の子音」で終わっているにもかかわらず、*-teče*, *-dača* という語尾が付いている。

- (1) 「d 以外の子音字」および「ai, ei, ui, ii 等の二重母音字」に終わる語幹で

| | |
|-------------------------|-----------------------------|
| aman-ača 「口から」(7a1) | üges-eče 「言葉 (pl.) から」(6b1) |
| yabudal-ača 「行いから」(6b4) | öber-eče 「自分より」(28a2) |
| jasay-ača 「禁令より」(23b2) | kög-eče 「音楽より」(25a2) |
| bolqui-ača 「成るより」(16a7) | eregüi-eče 「罪より」(23b4) ect. |

- (2) 「母音字」および「子音字 d」に終わる語幹で

| | |
|------------------------------|-------------------------------------|
| ači-dača 「恩より」(19a7) | ečige-deče 「父より」(16b7) |
| aγali aburi-dača 「徳から」(27a5) | qubčad-taca 「衣服 (pl.) から」(6a6) etc. |

なお、上のローマ字転写における語尾の t/d の書き分けは、字形を反映したものではなく、「語幹が γ, b, s, d, g, r で終わる」場合には t を、「語幹が母音字, n, ng, l, m で終わる」場合には d を書くという伝統的な転写方式によっている。字形から見ると、『孝経』では -dača/-deče, -tača/-teče は、常に ᠳᠠᠴᠢ という形で現れており、 ᠳᠡᠴᠢ という形は存在しない。これは、与位格の語尾が常に ᠳ という形で用いられているということと関連して、注目に値する。

なお、 ᠳ と ᠳᠡ の分布に関して、『孝経』では 3 語の例外が見られる。次の語はいずれも語幹が母音字で終わっており、奪格形としては ᠳ が期待されるところであるが、 ᠳᠡ が用いられている。

[ek]e-eče 「母から」(2a2)
 törö-eče 「道理から」(6b7, 31b6, 32a1)
 deger_e-eče 「上から」(32a5)

こうした例外の存在は、奪格語尾の 2 種類の異形態の使い分けの境界がすでにゆれ始めていたことの現れと見なすことができる。

これに関連して、『孝経』で次のような形が見られることにも注意を払っておきたい。

örön-eče 「西から」(33b7)
 emün-eče 「南から」(34a1)

上の語の語幹はそれぞれ, örön_e 「西」, emün_e 「南」という形であり、いずれも語幹末に母音(字)が存在する。これが *örön_e-deče, *emün_e-deče とならず、語幹末の母音(字)が消失する形で、奪格語尾 -ača/-eče が付いている。

奪格語尾に「-ača/-eče」と「-dača/-deče, -tača/-teče」という 2 種類の異形態が存在したというのは、「先古典期」のモンゴル語における特徴のひとつに数えられる。しかし、上に見たように「先古典期」のモンゴル語においてもいくつかの「例外」が存在して

おり、すでにそれらの使い分けに「ゆれ」が生じていたと考えられる。それらの「例外」をみると、いずれも -dača/-deče, -tača/-teče が用いられるべき環境に -ača/-eče が代わって用いられていることから、-ača/-eče という形の使用範囲が徐々に拡大して、奪格語尾が -ača/-eče という一つの形に収斂していく過程をそこに認めることができる。その後、-dača/-deče, -tača/-teče の使用範囲が狭まり、「古典式」のモンゴル文語でもっぱら -ača/-eče が使われ、それがそのまま現代のモンゴル文語に継承されていることは周知の事実である。

4. 場所格語尾について

ここでは、『孝経』において ㄱ (-a/-e) および ㄷ (-da/-de, -ta/-te) として現れる語尾を「場所格」として取り上げる。「場所格」というのは、呼び慣わされた名称ではないが、仮にこのように呼ぶことにする。⁷⁾

N. Poppe の *Grammar of Written Mongolian* (1954) では、-a/-e という形は、-dur/-dür, -tur/-tür とともに与位格語尾の 1 種として挙げられている。また、-da/-de, -ta/-te も「古典式でない (non-classical) モンゴル文語で用いられる」と与位格の語尾の一種として説明されている。⁸⁾ しかし、奪格語尾の場合と同様、ここでも「先古典期」のモンゴル文語において ㄱ と ㄷ が同一の格語尾の異形態の関係にあったという事実が見逃されている。-a/-e および -da/-de, -ta/-te という形は与位格語尾の -dur/-dür, -tur/-tür とは別の系列の語尾としてとらえ直す必要がある。

『孝経』では、ㄱ (-a/-e) は 25 回、ㄷ (-da/-de, -ta/-te) は 8 回現れ、それぞれ次のような環境で用いられている。⁹⁾

-a/-e : 「d 以外の子音字」および「ai, ei, ui, üi 等の二重母音字」で終わる語幹に。

-da/-de, -ta/-te : 「母音字」および「子音字 d」で終わる語幹に。

7) 実際、モンゴル文語における「与位格」と「場所格(仮称)」という二つの格の機能的・意味的な違いについては明らかでない点が多い。

『元朝秘史』のモンゴル語に関しては、

小沢重男「元朝秘史モンゴル語に於ける所謂 dative-locative の語尾について」『遊牧社会史探究』49, 1976。(小沢重男『中世蒙古語諸形態の研究』風間書院, 1979, 221-277 頁に再録)がこの問題を扱っている。

8) N. Poppe, *Ibid.*, p.75. ここで“non-classical”というのは、「時代的により新しい」、あるいは「仏教文典でない世俗的な」文献資料を指していると考えられる。

9) 文献によっては、-da/-de, -ta/-te が「子音字 s で終わる語幹」の後にも用いられている場合があるが、ここでは『孝経』の用例に従う。

これは、奪格語尾の ᠲ と ᠳ の分布の環境と同様である。例：

- (1) 「d 以外の子音字」および「ai, ei, ui, üi 等の二重母音字」に終わる語幹で
 quyitus-a 「後世の人 (pl.) に」(2b3) degedüs-e 「目上の人 (pl.) に」(9a2)
 irgen organ-a 「民に」(24b2) yayun-a 「何に」(24a2)
 tngri yajar-a 「天地に」(33b4) ügei-e 「無いということに」(23b5)
 uqaqui-a 「理解するに」(36b6) kökiyeküi-e 「昂揚するに」(25a1) etc.
- (2) 「母音字」および「子音字 d」に終わる語幹で
 eke-de 「母に」(5b2) tngri-de 「天に」(32b1)
 ongyud-ta 「神に」(5b3) čidayšad-ta 「できる者たちに」(10b1)
 siliyu sayid-ta 「君子に」(20a5) etc.

ここでも、ローマ字転写における語尾の t/d の書き分けは、「語幹が γ , b, s, d, g, r で終わる」場合は t を、「語幹が母音字, n, ng, l, m で終わる」場合は d を書くという伝統的な転写方式による機械的なもので、字形を反映したものではない。字形としてみると、『孝経』では -da/-de, -ta/-te は、常に ᠲ という形で現れており、 ᠳ という形は存在しない。

奪格語尾と同様、場所格語尾にもこのような 2 種類の異形態が存在していたということは、「先古典期」のモンゴル文語の特徴のひとつとみなされるが、「古典期」のモンゴル文語では場所格自体の使用範囲がきわめて限定されたものとなり、-a/-e が若干の定型的な表現として残っただけで -da/-de, -ta/-te はほとんど使われなくなった。

5. 再帰所属の属・対格語尾 -yuyan/-yügen について

モンゴル文語においては、再帰所属の範疇では属格と対格が「融合」している。つまり「自分の～の」を意味する再帰所属の属格と「自分の～を」を意味する再帰所属の対格は形の上で違いがない。以下、これを「再帰所属の属・対格」と呼ぶ。

再帰所属の属・対格には、次の二つの系列の語尾がある。¹⁰⁾

- (1) -ban/-ben (母音字の後で), -iyan/-iyen (子音字の後で)
 (2) -yuyan/-yügen

これらのうち後者 (-yuyan/-yügen) は、「対象が自分と緊密な関係にある」場合に用

10) N. Poppe, *Ibid.*, p.79f.

いられると考えられる。¹¹⁾

『孝経』では、第1の系列の *-ban/-ben* が 28 回、*-iyan/-iyen* が 30 回用いられている。

前者は「母音字で終わる語幹」に、後者は「子音字で終わる語幹」に付いているが、これが「古典式」モンゴル文語の正書法と異なるのは、28 回現れる *-ban/-ben* のうち 23 回が語幹と連ねて書かれていることである。(*-ban/-ben* の残りの 5 回および *-iyan/-iyen* は、古典式モンゴル文語の正書法と同様、語幹から離して書かれている。) このように、再帰所属の属・対格語尾の *-ban/-ben* が語幹と連ねて書かれることがこの時代のモンゴル文語で「正書法の規範」として存在していたものかどうか直ちに断定することはできないが、一つの興味深い「傾向」として指摘することができる。

次に、第2の系列の *-yuγan/-yügen* は、『孝経』では 16 回用いられている。

ečige-yügen 「自分の父の」(1 回)

ečige-yügen 「自分の父を」(3 回)

eke-yügen 「自分の母を」(1 回)

ečige eke-yügen 「自分の父母を」(11 回)

これと並んで、*uridus-uγan* 「自分の祖先の」という形で *-uγan* という語尾が 1 回だけ現れることに注意を払っておきたい。

N. Poppe の *Grammar of Written Mongolian* (1954) において、*-yuγan/-yügen* という形は「語幹末の音に関わりなくすべての名詞に」付くとあり、同書に *-uγan/-ügen* という形についての記述は見あたらない。¹²⁾

この *-uγan/-ügen* という語尾の形は、13~14 世紀の他のモンゴル文語資料にもほとんど見出すことができないが、1335 年の張愷瑞碑文の中には、*ejen-ügen* 「自分の主人の、自分の主人を」という形が 5 回、*uridus-uγan* 「自分の祖先の」という形が 1 回現れる。(なお、同碑文には *ejen-yügen* 「自分の主人の、自分の主人を」という形も 2 回現れる。)

他方、『元朝秘史』のモンゴル語においては、*-yu'an/-yü'en* と並んで *-u'an/-ü'en* という形が現れ、前者は母音で終わる語幹に、後者は子音で終わる語幹に用いられていることを確認することができる。『元朝秘史』の例：

11) 『元朝秘史』の再帰所属対格形については、小沢重男 “A study of some reflexive-accusative suffixes in Middle Mongolian” 『言語研究』45, 36-46 頁 (小沢重男『中世蒙古語諸形態の研究』風間書院, 1979, 279-289 頁に再録) を参照。

12) N. Poppe, *Ibid.*, p.79. 同書巻末の Index にも *-uγan/-ügen* という形は掲載されていない。

(1) 母音で終わる語幹に

- aqa-yu'an (1:20:8)「自分の兄の」、 de'ü-yü'en (12:14:3)「自分の弟を」、
 qubi-yu'an (1:35:2)「自分の黄色い馬の」、 eke-yü'en (1:11:4)「自分の母の」、
 duta'u-yu'an (9:25:6)「自分の不足分を」、 ečige-yü'en (7:28:4)「自分の父を」、 etc.

(2) 子音で終わる語幹に

- morin-u'an (4:3:2)「自分の馬の」、 kö'un-ü'en (5:44:5)「自分の息子の」、
 quru'un-u'an「自分の指の」、 ökid-ü'en (8:45:2)「自分の娘たちの」、
 eič'in-ü'en (11:20:5)「自分の使者の」、 etc.

『元朝秘史』のこうした用例と並んで、モンゴル文語における接尾辞の一般的なあり方からしても、『孝経』および1335年の張応瑞碑文における -uγan/-ügen という形が、-yuγan/-yügen という形と異形態の関係にあったという推定が成り立つ。すなわち、モンゴル文語における格語尾は、「母音字で終わる語幹」につく場合と「子音字で終わる語幹」につく場合で異なった形(異形態)を取るものが多く、その際「母音字で終わる語幹」には子音字始まりの形(語尾)が、「子音字で終わる語幹」には母音字始まりの形(語尾)がつくことが多い。たとえば、対格語尾の場合、「母音字で終わる語幹」につく形は -yi であり、「子音字で終わる語幹」につくのは、-i である。この場合、母音字で終わる語幹に付く形 (-yi) は子音字で終わる語幹につく語尾 (-i) の前に -y- を加えた形であり、-yuγan/-yügen と -uγan/-ügen との関係は、ちょうどこれとパラレルにとらえることができるからである。

すなわち -yuγan/-yügen と -uγan/-ügen は、「先古典期」モンゴル文語において、互いに同一の語尾の異形態の関係として存在していたと考えることは無理がない。『孝経』のモンゴル文語の例は、数が限られているものの、この使い分けの規則に合致している。上述の N. Poppe の説明にあるように、「古典式」モンゴル文語では -uγan/-ügen という形はすでに用いられていない。「先古典期」の文献である1335年の張応瑞碑文において、ejen-ügen の形と並んで ejen-yügen という形もみられることは、両者の使い分けの境界が当時すでに曖昧になっており、-yuγan/-yügen が -uγan/-ügen の領域に範囲を拡大してゆく過程を反映しているものとみなすことができる。

6. 程度格語尾 -čaya/-čegeについて

N. Poppe の *Grammar of Written Mongolian* (1954) では、格語尾に -čaya/-čege という形の記述はない。同じ著者による *Introduction to Mongolian Comparative Studies* (1955) ではこの語尾を Terminative として、「ものの高さを示す」と説明して

いる。¹³⁾ そこでは、「これは、稀な格でありこの格で現れる語はほとんどない。したがって、このほとんど化石化した格形は副詞とも見なし得る」と書かれている。

『孝経』では、この語尾が、第9章に1例だけ見いだされる。

- 18a2 tegüber kümün ečige eke-düriyen
 故に 人が 父 母に対して(←自分の)
- 18a3 čiqulalaqu kemebesü ebüdügčege nilq_a üčügen-eče
 大切にすゝる気持ちは 膝ほどの 幼少(の頃) から
- 18a4 boluyu
 生じる

ここで、ebüdügčege は ebüdüg 「膝」に -čege という語尾のついた形であり、ここでは「膝ほど(の高さ)の」という意味で、nilq_a üčügen 「幼児・幼少」という後続の名詞相当語句を修飾している。つまり、N. Poppe のいう「副詞」としてではなく、「形容詞」としての働きをしていることが注目に値する。これに加えて、この語尾が語幹と分かち書きせずに、連ねて書かれている点にも注意を払っておきたい。

13) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955, p.206.

알타이학보

제 9 호

1999년 6월

목 차

碑文《译语》女真字非大小字混合考
 —纪念女真大字创制八百八十周年— 爱新觉罗 乌拉熙春 · 1
 三家子 만주어의 i 예기 동화 고통호 · 11
 우랄제어의 자음교체에 대한 연구 정도상 · 39

제3차 국제학술회의 발표 논문 1998년 10월 25~27일

Implications of Mistakes in Mongolian
 Buddhist Works Koichi HIGUCHI · 65
 アルタイ諸言語のいくつかにみられる所有/存在を示す
 一形式について 風間伸次郎 · 93
 『孝経』のモンゴル文語における曲用語尾の特徴 栗林 均 · 125
 蒙語老乞大 간행 시기에 관한 몇 문제 延圭東 · 135
 할하 몽골어의 음절구조 —장모음과 이중모음을 중심으로— 송재목 · 147
 阿爾泰語言中動物詞語的薩滿文化含義 趙阿平 · 163
 満語构词法 安双成 · 167
 古突厥语与蒙古语语音对应规律及其某些特点 武·呼格吉勒图 · 191
 Tungus語 聖書에 關해서 金東昭 · 207
 알타이諸語와 韓國語의 前舌高母音化 現象 金周源 · 233
 한국어·몽골어·만주어의 의도구문 비교연구 최동권 · 249
 할하 몽골어의 유의동사 харах ‘보다’와 үзэх ‘보다’의
 일부 형태-통사적 속성 유원수 · 265
 튀르크어와 몽골어에 있어서의 色彩의 상징적 의미 최형원 · 283
 Эртний Энэтхэгийн ‘Шукасаптати’ зохиолын
 монгол аман хувилбар Р. Чүлтэмсүрэн · 295
 Монгол хэлний “qoyar/jirin” гэдэг
 тооны нэрийг мөшгисөн нь Ц. Шагдарсүрэн · 313
 휘보 335